

日本語教育の古い歴史を持つ大学に 相応しいレベルを目指して

中国
ちゅうごく

上海交通大学外国語学院
上海交通大学
日本語学部教授

計 鋼
けい こう

このコーナーでは、特色ある日本語教育を実践している機関の教師の方々に、現場のコースデザインやコース運営の状況について、紹介していただきます。

1 上海交通大学における日本語教育の歴史

『交通大学校史(1896-1949)』(上海教育出版社)によると、清の光緒25年(1899年)春、日本を通じてヨーロッパ文明を学ぶために、上海交通大学の前身の南洋公学に訳書院が置かれた。当時翻訳された書物はほとんど日本語の本だったという。この訳書院は後に商務書局と一つになって、商務印書館として今日まで活躍している。

また、清の光緒27年(1901年)春、役人養成のため、南洋公学に特班(特別クラス)が設けられた。蔡元培先生がその主任教師を務め、日本語コースを設け、自ら日本語の授業を担当した。史上有名な辛亥革命の中堅志士の多くがこの特班のメンバーであった。

さらに同年春、日本語の書物を大量に中国語に翻訳するニーズに応じて、南洋公学に東文学堂が設立された。東文学堂は日本語の通訳と留日予備生との養成を旨とし、日本語専攻の学生を40名募集し、一年ほど授業を続けた。のちに、上海交通大学と改称してからも、日本語教育が第二外国語として続けられてきた。そして、1972年中日両国国交正常化をきっかけに、当大学の日本語教育はさらに新しい段階に入った。

2 新しいシラバスとその主な内容

「大学日本語教育」とは、大学で選択科目としての第一外国語(以下「一外」と略す)と第二外国語(以下「二外」と略す)のことをいう。

大学日本語(一外)教育に適用する『大学日本語教学大綱(日本語非専攻本科用)』(以下『一外シラバス』と略す)は1989年6月に中国高等教育出版社によって出版された。4年後、1993年4月に、大学日本語(二外)教育に適用する『大学日本語(第二外国語)教学大綱(日本語非専攻本科用)』(以下『二外シラバス』と略す)も、同じ高等教育出版社によって出版された。(写真1)



写真1

『一外シラバス』と『二外シラバス』との主な内容は以下の通りである。

	大学日本語(一外)	大学日本語(二外)
対象	中学校と高校での日本語教育を終え、1,800語修得した者。	初心者
目的	良い読解力、ある程度の聴解力と翻訳力、初歩的な作文力と会話力を養成すること。	聴く、話す、読む、書く、訳すという5つの面において、基礎訓練を行うこと。
学習時間	4時間/週、60~70時間/学期。合わせて、4学期、240~280時間。(※4級レベルまで)	4時間/週、60~70時間/学期。合わせて、2学期、120~150時間。
語彙量	5,000語	1,200~1,500語
目標	良い読解力と翻訳力(和文中訳)、 大した間違いのない、短い文章を書く作文力。 簡単な日常会話をする聴解力と会話力。	簡単な日本語を聴く、話す、読む、書く能力。 辞書を調べながら簡単な和文中訳をする翻訳力。

* 中国教育省が実施する外国語試験。日本と違って、中国の4級はレベルが1級より上。

3 上海交通大学の日本語教育事情

中国の他の大学と同じように、当大学には大学日本語教育の一外コースと二外コースとがある。この二つのコースを利用して勉強している者の90%以上が理工科系の学部学生と大学院生である。

一外コースの学習者のほとんどが吉林省から来た者で、しかも朝鮮民族が圧倒的に多く、10人中9人がそうである。

る。毎年、10人前後の新入生が必ず入ってくる。二つの学年を合わせて、学習者は15~20人くらいである。講義は週4時間で、2学年(4学期)通して、合わせて280時間ほどある。

二外コースの場合は、一外コースより人数がはるかに多く、理工科系の学部学生の他に、文科系(特に英文科)の学生もいれば、博士コースや修士コースの大学院生もいる。人数の多い順から言えば、一番多いのは理工科系の大学院生で、1学年に日本語クラスが八つあり、学習者が約400人いる。次は理工科系の学部学生向けの日本語クラスで、1学年にクラスが二つが三つくらいあり、合わせて150~200人の出席者が顔を出す。それから英文科の学生のためのクラスで、2年生から4年生まで勉強しているの、六つのクラスで、合わせて100~200人いる。以上全部で、1学年に約700人程の学生が、二外コースを利用して勉強しているわけである。

ところが、理工科系の学習者は専攻科目やコンピュータの勉強、実験、研究などに追われて授業に出られないことがしばしばある。そういうわけで、最後まで日本語の勉強を続けていける者は学習者全体の50%~60%しかないと思われる。

授業時間といえば、大学院生向けの授業は週に6時間ずつ、フル2週間なので、合わせて1学期120時間である。学部学生向けの授業は週に4時間ずつ、平均して1学期18週間で講義するので、合わせて2学期の150時間くらいである。英文科向けの日本語授業は週4時間で平均して1学期16週間なので、合わせて6学期で320時間ほどあることになる。

また、大学日本語教育とは言えないけれども、ユニークな日本語教育も当大学で行われている。例えば、当大学の中日文化交流センターに置かれた日本語教室がその一つである。同センターには、日本人留学生向けの中国語教室と中国人学生向けの日本語教室とがある。1年間



写真2

の集中コースで、それぞれ10~15人前後の小さな教室だが、かなり効果が見られる、ユニークな教室である。午前中は中日の学習者は二つの教室で別々に講義を受けるが、午後は一つの教室となって、かわるがわる中国語と日本語との会話ドリルを繰り返すのである。(写真2)

4 日本語教育スタッフと授業スタイル

当大学の日本語学部には日本語教師が現在7名いる。その内訳は、教授1名、助教授3名、講師2名、助手1名である。学期に一外のクラスが二つ、二外のクラスが大学院生向けの三つ~五つ(平均して四つ)、学部学生向けの二つ、英文科の学生向けの六つあって、全部で13~15くらいになる。教師1人に少なくとも二つのクラスが与えられているわけである。

授業の仕方を大きく分けてみると、一外スタイルと、理工科系向けの二外スタイルと、英文科向けの二外スタイルとの三つある。

4-1. 一外スタイル

一外コースの学生は、中学校と高校で6年間通して日本語を習ってきたので、ある意味では中級レベルに達していると言える。特に、朝鮮民族の学生にとっては、日本語の文法はもはや大した問題にはならない。ところがそれに対して、和文中訳とか、作文とか、会話とか、聴解などは大変難しいようである。即ち、文法はうまいが、手、口、耳はだめだというタイプなのだ。それは、朝鮮語の文法が日本語の文法に近いから、近道しようと朝鮮語の説明付のテキストや辞書を使って日本語の勉強をしてきたので、日本語を朝鮮語にはうまく訳せるが、中国語の共通語にはあまりうまく訳せなくなってしまったからだという。そういうわけで、教師はいろいろ工夫しながら、日本語を中国語の共通語にうまく訳す方法を指導してやらねばならない。そのために、時々学生に和文中訳をさせる。そのうえで、それぞれ自分の訳文を発表させ、比較させ、訳し方の良し悪しが分かるまで練習を続けていく。

一方、テキストの内容について、一番簡単なものから、会話の練習をさせたり、テープを聴かせたり、短い文章を書かせたりして、授業を進めていく。そのうちに、進歩が見られるようになっていく。

4-2. 理工科系向けの二外スタイル

理工科系二外コースを利用して学習者には学部学生と大学院生とがある。100人が100数十人も入れる大き



写真3
しゃしん

い教室を使うことがこのコースの特徴だと言える。みんなイロ八から勉強を始める。大人の外国語勉強だから、文法中心で進めるのが割と効果的なので、できるだけ少ない時間で文法を分かりやすく注入するのが一般的な教え方だと思う。(写真3)

学部学生の場合は、1学年(2学期)で150時間勉強することになっているので、週2回、2時間ずつというわけである。文法中心で、読解と和文中訳に力を入れるのが普通である。会話と聴解は時間の関係であまり要求されていないが、簡単な日常会話だけに付けさせる。

一方、大学院生の場合は、実験や研究に追われ、ゆっくりと勉強していく余裕などとてもない。それで、1学期120時間の学習時間となったのである。週2回だが、3時間ずつ授業を行う。無理だと思われがちだが、頭のいい者が多いからか、文法や言葉を覚えて自分の専門分野の文章や論文をうまく読みこなすことのできる者が多く見られる。

講義はイロ八からである。仮名と発音の勉強は2週間(週4時間)で済ませるが、仮名は数が多いから、2週間では平仮名や片仮名の書き方がなかなか覚えられない者が多いようだ。それにもかかわらず授業は進められていくが、そのうちに仮名とその書き方をしっかりと覚えられるようになるのが普通である。

授業は文法中心だから、判断文(だ、です、である)描写文(形容詞、形容動詞)存在文(ある、いる)叙述文(存在動詞以外の動詞)の順で進められていく。それから、授受関係文、受身文、使役文、敬語文など、助

動詞や補助動詞による特別な文の勉強をさせる。文法について説明しながら、学習者に文を作らせたり、本文を中国語に翻訳させたり、助詞のまるうめや助動詞の選択練習などをさせたりする。習った文法や言葉で中文和訳をする練習はいつも宿題とする。時には作文も書かせたりする。宿題や作文を直すことによって、学習者がまだはっきり理解していないところが分かる。その中から代表的なものを取り出し誤用例として、次の時間に学生と一緒に分析したりする。

4-3. 英文科向けの二外スタイル

英文科の学生は2年生から英語の勉強と同時に日本語の勉強を始める。イロ八からである。4年生の第2学期の前半まで講義するので、週4時間で、合わせて350時間余りあるわけである。これは、シラバスの要求をはるかに超える。

英文科の学生は日本語の勉強に大いに興味を示し、力を入れている。時には専攻の英語よりも熱心に勉強してくれる。就職のためにもう一カ国語を覚えようと頑張っているようである。

大人になってからの日本語の勉強なので、文法中心の勉強法は一日も早く日本語を身に付けさせるための近道だと言えよう。そういうわけで、文法にポイントを置いている。

一方、授業時間が多く、会話や聴解の練習にも時間を多く割いている。時々本文の内容を中心に会話のドリルをさせる。テープも聴かせる。授業の初めに日本語で数分間の自由発表をさせることもある。

5 使用教材

授業スタイルや学習対象によって教科書が決められる。

一外の場合は、『大学日語(1~4)』(顧明耀・徐祖瓊主編、高等教育出版社)と、『高級日語教程』(李士俊・馮建力等著、高等教育出版社)をテキストとして使用している。但し、『大学日語』の説明には文構造についての説明が多すぎるし、しかも専門レベルまで説明されているから、日本語学を専門にする気のない学習者にはあまり喜ばれていないようである。理屈ばかり学習するより、むしろ日本語そのものを活かす能力、例えば会話力や聴解力などを向上させるほうが喜ばしいらしい。だから条件を整えば、ビデオやマルチメディア教材を併せて使ってみたいと考えている。

理工科系向けの二外教室では、いろいろなテキストを使ってみたことがある。例えば、当大学で作成された

『日本語』（上海交通大学日語教研室）『日語（日本語非専攻用）』（上海外国語学院日語教研室編、上海訳文出版社）『現代日語 - あたらしい日本語』（吉田弥寿夫編、上海訳文出版社）『中日交流標準日本語』（中国人民教育出版社・日本光村図書出版株式会社共同編集）などである。これらのテキストはそれぞれ特徴を持つものばかりだが、必ずしも二外クラスに合うものではないようである。

『中日交流標準日本語』を例にしてみよう。このテキストは中国で一番広く用いられていて、評判のいい日本語教科書だが、4冊もあるから、授業時間の少ない二外クラスには向いていない。中途半端に終わってしまうのが一番大きな問題なのである。だから、今年（1998年9月～1999年7月）から、『大学日語（第二外語）教学大綱』の要求に応じて作成された『大学日語（第二外語）』（王詩栄・林璋編、高等教育出版社）を用いることになっている。

英文科向けの二外授業の場合は、『日語（日本語専攻用）』（上海外国語学院日語教研室編、上海訳文出版社）『新編日語』（周平・陳小芬編、上海外語教育出版社）『中日交流標準日本語』などが用いられたことがあるが、時間的に許されるので、『中日交流標準日本語』と『新編日語』が良いようである。日常会話の能力を向上させるのにも役立つし、日本語能力試験の受験勉強にも都合がいいから、これからも使っていきたいと思う。（写真4）



写真4
しゃしん

6 教育効果と問題点

一外コースの場合は、学習者は普通中国の日本語4級試験に合格する。また、日本の日本語能力試験の1級を受験しても、ほとんど合格している。それにもかかわらず、学生の会話力は劣っている。それは日本語で話す場所やチャンスがないからである。

二外コースの場合は、日本語についてのイロハ、特に基本的な文法は大体学習するので、学習者は簡単な文章、

または専門分野の文章などが読めるようになる。それに対して、作文力や会話力が劣っている。それは、ドリルの時間も、日本語を用いる場所も機会もないから、学習者がそれ以上進んで勉強する気がないからかと思われる。

7 今後の課題

日本語（一外・二外とも）の勉強をしている者は、日本語そのものを習おうとするというより、むしろ日本語を交流の手段として身に付けようとしているのだと思う。だから、文章が読めるといっただけではまだ不十分だ。21世紀に入ろうとしている今日、人間同士の交流または相互理解が最も重要視されてくるだろう。そういうわけで、いかに会話力を向上させるかが、今後の課題となると思う。

一方、教育手段が日進月歩になりつつある今日、中国の大学での日本語教育手段（日本語専攻の場合を除いて）はほとんど20年か30年前のままだと言ってもいいようである。「大学日本語」（一外・二外とも）は、あまり重要視されていないのが現状である。授業時間が少ない上に、教育手段も随分遅れている。黒板1つ、チョーク1本のケースがよく見られる。もちろん、伝統的な教授法や教育手段がダメだと言うわけではない。ここで言いたいのは、聴く能力と話す能力とは文法の勉強と違って、先生の説明だけ聞いて身に付くものではないから、リアルな雰囲気が必要なのである。だから、テープとか、ビデオとか、さらにコンピュータ、インターネット、マルチメディア教材などを利用して、教育効果を高めなければならない。

当大学は今学年度から日本語教育をさらに新しいレベルにしようと図っている。日本語専攻コースの再生に拍車をかけていると同時に、大学日本語教育手段の改善にも力を入れようとしている。そのために、何よりもまず、日本語教育スタッフ全員のレベルアップに取り組むべく、教育現場での研修と日本での研修の機会を作りたい。一方、教育機器や音声資料などの援助申請も考えている。

いずれにしても、日本語教育においては、中国で一歩古い歴史を持つ大学に相応しい高いレベルを目指して、努力していきたいと考えている。

* 文中の固有名詞は日本語の音読みに統一しました。